

## 研究成果報告書

主研究者	川崎 勝	所属	国際総合科学部
共同研究者			
研究課題名	過去（スペイン風邪）と現在（COVID-19）のパンデミック対応の比較から見る社会の変貌		
研究内容と成果の概要	<p>国家による公衆衛生体制ならびに病原微生物学の誕生後、はじめて発生した大規模なパンデミックが約 1 世紀前のスペイン風邪であった。スペイン風邪と COVID-19 を比較した際、いずれも 1) 感染力と病原性がともに強く、2) 呼吸器症状を主症状とするウイルス性疾患の、3) 新興感染症であり、さらに 4) ウイルスが次々と変異を遂げたことなど、疾病としての共通点が多い。</p> <p>一般に、新興感染症の流行が発生した際、（少なくとも流行初期において）ワクチンも特効薬も存在しない。そのため、流行を抑え込む手段は、いわゆる NPIs（Non-Pharmaceutical Interventions：薬によらない介入）しか存在しない。そして、抑え込めなかった場合、対症療法による救命医療頼りとなるが病原性が強ければ焼け石に水状態である。これがスペイン風邪の場合に実際に生じたことであった。NPIs として、COVID-19 と同様にマスクの着用が呼びかけられ、実際に多くの人々が着用したが抑え込みには程遠かかった。まだ比較的病原性が弱かった欧米での流行初期（1918 年 3～8 月）が第一次世界大戦の交戦中で情報が隠匿され、パンデミック化を抑えられなかった点が決定的であった。</p> <p>翻って COVID-19 では、グローバル化の著しい進展により短日時でのパンデミック化は不可避であったが、NPIs（その内実は国によって大きく異なるがロックダウンなどかなり強力な行動制限が課された国も多い）がある程度効を奏し、重症化しやすい高齢者の人口に占める割合が著しく増大しているにもかかわらず、犠牲者は比較的少なく済もうとしている。これには、医学医療が著しく発展した（特に、驚異的な短日時で有効なワクチンが開発され、国際保健の枠組により普及した）他に、栄養状態・衛生状態が改善されていたことが大きい。</p> <p>他方で、マスメディアやネットの発展にともなう弊害も大きかった。マスコミは著しく危機感を煽る報道を重ねた。危機意識の共有はパンデミック対策において重要であるが、過剰な煽りは冷静な対応が必要とされる場合には害悪をもたらす。また、ネットでは反ワクチン言説を代表とする諸々の「陰謀論」が飛び交い、SNS を通じて拡散され続けた。これは日本に限られた話ではなく、WHO はインフォデミック（infodemic）への危機感をあらわにしている。誤った情報の拡散普及は病原体以上に危機をもたらしうることを明らかにしたのが COVID-19 であった。</p> <p>地震等の自然災害をゼロにするのが不可能なように、今後の新興感染症の発生をゼロに抑えることも不可能であろう。何よりも重要なのは「安全・安心」の確保であるが、コロナ禍が明らかにしたのは「安全≠安心」であることである。災害やパンデミックに関して、発生したも犠牲者を可能な限り抑えること（医療安全というフェイルセーフ）が「安全」の確保であるが、それをなし遂げたとしても「不安」であり続けることがあることを示しているのがインフォデミックである。</p> <p>今回の COVID-19 の最大の教訓は、いかにして物理的な死者数を抑えるかということと同等に、いかにしてインフォデミックを抑えるか重要であるかを教えてくれたことであろう。</p>		

研究進捗状況・研究成果の公表状況等

論文、学会等発表、実データの利用状況、研究の有用性を広めるための活動など

現在、研究内容をまとめている最中であり、まとめ次第、論文化して投稿予定。

その他特記事項